おっさんのリメイク冒険日記3

～オートキャンプから始まる異世界満喫ライフ～

「試し読み版」

緋色優希
イラスト 市丸きすけ

ツギクルブックス

アントニオ・フォン・オルストン
オルストン家の三男。魔導鎧を使いこなす上級冒険者。
シルヴィ
精霊の森のニンフ。普段はレインに仕えている。
ミハエル・フォン・アルバトロス
アルバトロス王国の第２王子。フットワークが軽く、縁の下から王国を支えている。
ジョリー
アルフォンスに協力的な精霊の森の大神官。ケーキなどの甘いものが大好き。
真理
アルバトロス王国初代国王の船橋武が創った魔導ホムンクルス。
アルフォンス・フォン・グランバースト
本作の主人公。オートキャンプ中に異世界に転移したアラフィフおっさん。
主な登場人物

マルクス・フォン・ニールセン侯爵
ベルンシュタイン帝国の元軍人で、瞬神の異名を持つ。
シャリオン
ベルンシュタイン帝国の第2皇子。性格が悪く、謀略で人を陥れるタイプ。
バラン・フォン・ロンダル
ベルンシュタイン帝国にいることが多い、剣と魔法が一流のSランク冒険者。
レイン
ファルを生んだレインボーファルスの成体。優しい性格で子煩悩。
リック・フォン・アスペラルド
ベルンシュタイン帝国にいることが多い、狡すっからい野心家のSランク冒険者。
ファル
レインボーファルスの幼体。右はレインボーファルス形態、左は人間形態。

これまでのあらすじ

ひょんなことから、次元の裂け目を通じて異世界へやってきたアルフォンス。莫大な魔力によって物体をコピーしたり、強力な魔法を覚えたりしながら冒険者となる。ダンジョンではエリやアルバトロス王国のエミリオ殿下を救出し、アドロスの町に巣食っていた悪党たちを成敗。王国を脅かしたスタンピードを食い止めるなど、数々の活躍によってSSランクの冒険者となる。同時に、名誉侯爵の称号も得た。

いっぽうで、孤児のための「ケモミミ幼稚園」を建設。

初代国王によって作られた魔導ホムンクルスの真理と出会い、可愛い獣人の子供たちと穏やかな日々を送る。ことあるごとに子供を保護して、着々と人数を増やしていく真理。主人公は、子供たちに手を焼きながらも、園長先生として異世界ライフを満喫するのであった。

親友アントニオのAランク試験のために出向いたベルンシュタイン帝国では、王都襲撃の計画が密かに進行していた。稀人としての能力と知略でそれを打ち砕き、アントニオは無事、Sランクに昇格。伯爵位を得て、オルストン家を再興した。

だが、帝国は決して諦めたわけではなく、さらなる陰謀をたくらむのだった。

1章　おっさん、殺しのライセンスを手に入れる

艱難辛苦の末、見事にSランク冒険者となり、家を再興してオルストン伯爵となったアントニオ。だが、これであの帝国が無用なちょっかいを諦めたとは思えない。なにより、瞬神ニールセン侯爵が大人しく引っ込んでいるわけがないのだ。今や帝国では、皇帝や第2皇子のような急進派が主流だ。勢力拡大に気乗りしていない皇太子は、空気も同然だろう。気合いを入れて頑張れ、次期皇帝様よ。

そして、ヤツらはケモミミ幼稚園を襲撃する計画を立てていた。ただいまケモミミ幼稚園では、危険予知訓練を絶賛実施中。警護の冒険者も増量しておいた。王都のギルドマスターであるアーモンの伝手で、Bランク冒険者を2人手配できたのは朗報だ。

「へー、あの瞬神が相手か」

「それは面白い」

2人とも実に楽しそうだった。ベリルとジョンソン。アーモンの話だと、かなりの強者だそうだ。ベテランがいてくれて心強いぜ。

アルスなどは飄々として、悠然と構えている。

「そうだね。攻めてくるなら歓迎してあげなくちゃね」
などと言いながらニコニコしているのは、優雅な所作のようにさえ見える。
こいつが一番怖えよ。俺はまだこいつの能力を碌に知らない。知っていたらアントニオみたいに魔改造して、ブーストアップしてやるのに。いざとなったら勝手に改造しよう。
そういえば、アントニオは嫁さんを連れて領地へ行ったんだったな。またいつでも遊びにきてくれと言っていた。今は、とてもそれどころじゃないんだけど。ベビー用品とかも開発しないといけないな。少し領地開発を手伝ってやるのもいいし。まあそれも、帝国との件が全て片づいてからの話かな。

とりあえず帝国まで偵察に赴くとしようかな。本陣の守りはSランク1名、Bランク2名、Cランク20名の冒険者軍団に、強力な魔道ホムンクルスのお姉さんが1名だ。
真理は魔法が使えると言っていた。もともと本人自体が魔法の塊みたいなものだしね。さらに俺の魔法をてんこ盛りにして、アイテムボックスに突っ込んでやったし。
「あたし、今日から女魔王を名乗ってもいいかしら」
と真理は笑って腕輪を日差しにかざしていた。うん、いいよ。
さらに戦闘ポッドにバリアポッド、ナースポッドに至るまで、山盛りの装備を突っ込んだ。

「あなたは、あたしに何と戦争させようとしているのかしら……」
気にせず、さらにバッテリー用のベスマギル１００垓ＭＰ分を突っ込んでおいた。これだけ預けておけば、帝国のＳランクなんかには負けないだろう。
駐屯する部隊用の兵舎として、もう一つセーフハウスと同じものを建てた。その後ろには射撃場を設け、米軍の制式自動小銃ベースの魔法銃を兵に貸与して訓練した。
魔法銃には高純度の魔石が組み込んであり、俺の魔力を込めておいた。予備弾倉ならぬ、予備魔石も持たせている。本物の銃の弾倉型に作っているので交換も楽だ。セレクターレバーで魔法の種類が切り替えられる。スタン、ストーンバレット、アイスランス、ファイヤーアロー、マジックアロー、エアカッター、エアバレットといったあたりが使える。初級のものばかりだが、引き金を引いているだけで撃ちまくれるし、魔石の魔力消費量を気にしなければ威力も上げられる。魔法を使えない者も魔力の制限なく撃てるから、なかなかのものだ。集団戦闘の間合いが、この世界の常識よりも遠くなるので、初見の相手には有効といえる。
あくまでも貸与であり、本人以外は使えない制限付きだ。分解しようとすると、とんでもないことになる。転移魔法によるホーミング機能が付いており、真理のアイテムボックスがホームになる。もちろん真理の意思でも回収できる。
本来は出してはいけないものであり、俺も出したくはないが……子供たちの安全を最優先す

ることにした。ギルマスが聞いたら、目から火を吹いて怒るかもしれない。この魔法銃が欲しくて変なちょっかいを出してくる貴族や外国勢力がいたら、なぜ俺が貴族殺しと呼ばれているのか、その身で思い知ることになるだろう。

久しぶりの帝国だぜ。

どうせ俺が転移持ちなのは帝国にバレている。うろうろしていたって構わないが、今回は瞬神の動向を探るのが目的だ。大人しくしよう。

「お邪魔しまーす」

俺は、こっそりとニールセン侯爵邸に転移した。インビジブルや、他の隠密系の能力も発揮している。ディスサーチを使用しているため、俺の存在は絶対にバレないだろう。

侯爵は執務室にいて、椅子に座っていた。そして……。

なんだ、居眠りをしていやがる！　しかし、余計なちょっかいをかけて起こすわけにもいかないな。遠慮なく部屋の中の資料を調べて、コピーしまくってやった。

王国へ侵攻したり、うちを襲撃したりするための資料が集まったぞ。ＭＡＰで検索したら、ごろごろ出てきたぜ、畜生。隠し金庫の中にもあったので、金庫ごとアイテムボックスに収納してコピーした。あ、お爺ちゃん、もっと寝ててもいいですからね。俺はうきうきで撤収した。

資料を確認すると、帝国は今回のアルバトロスへの侵攻を断念したようだ。弱気なとか、王国など恐るるに足らずとか勇ましい意見が相次いでいたが、結局、上の連中も今回は絡め手でジャブを食らわすという形で意見がまとまったらしい。

内側から崩そうとしていたのは、最近、王国の腐敗にメスが入り、少し風通しがよくなったこと、裏切り者を出しづらい雰囲気になっている王国の現状を打開したいようだな。戦争は、なにも正面からのぶつかり合いだけではないのだ。悪いな、全部俺の仕業だったわ。

それらの件もあり、『俺を潰す』というわけだ。

前回みたいな状況で正面からやるわけにはいかないので、こそこそと攻めてこようとしている。子供たちの拉致誘拐に始まり、いろいろな手管で俺を精神的に追い詰めるという作戦だ。

これが日本なら、どんな脅しがあっても泣き寝入りするしかない。

その状況では警察は動いてくれないし、実際に事件が起きてからでは手遅れだ。だが、ここは日本ではない。

「仕留めていい」

自力救済が許されているというか、それが基本なのだ。むしろ仕留めないと問題があり、他者から糾弾されるだろう。

日本では絶対許されないが、ここでは王の名の下に許される。既に俺の中で、ヤツらは完全

にギルティだ。情報戦では、こちらが有利。この遅れた世界に地球人の戦い方を見せてやろう。
謁見の場に来た俺は、集めた資料一式のコピーを国王陛下に手渡した。その報告に陛下もかなり難しい顔をする。そして、俺はぶっちゃけた。
「陛下、とことんやっちゃってもいいですか？」
「うむ。許可しよう。この王の名の下に」
俺は見事に『殺しのライセンス』を手に入れた。

今日は皇帝ちゃんのところに遊びに行こうと思う。
目的は、皇子ども、特に危険人物と想定される第2皇子にマーカーを付けることだ。
転移早々、件の第2皇子の面を拝む。無駄に煌びやかな謁見の間で、皇帝と向き合っていた。玉座でピンッと背筋を立てる皇帝。矍鑠として嫌な野郎だ。肩肘ついて、もっとだらけていたっていいのに。
「皇帝陛下。アルバトロス王国への侵攻はいつになさるのですか？」
このクソ皇子め、いきなりなんてことを言うんだ。そのニヤニヤした面を引っ込めろ。この場でこいつらの首を全部刎ねておきたい気分になる。さすがにマズイので手は出せないが。なにしろ不法侵入中の身だからな。

この皇子、パッと見に性格が悪いのが分かるな。短い金髪、酷薄そうな目や顔付きもよくないし、同様の薄い意地悪そうな唇。これは確実に嫌われ者の顔だ。うちの子が見たら絶対に泣くぞ。第1皇子の方に分があったのも、そういう部分があるからではないだろうか。

「そう慌てるな。ものには順序がある。あの暴れん坊に出てこられても困るだろう。現にお前は既に2度もしくじった。転移魔法使いは、本来、戦争でも使える駒だ。それをみすみす失いおって……もう手に入ることはあるまい。残りの3人は他国の子飼いだ」

なるほど。これまでの実行犯は、第2皇子だったわけか。万一失敗しても、しょせんはスペアの皇子だしな。もしかすると、パルミア家の一件もこいつが主犯なのかもしれない。

よし。本日の俺の行動は、こいつのストーカーに決定した。

それにしても、こいつの駒である転移魔法使いを潰せたのは僥倖だった。残していたらと思うと、ゾッとするぜ。

「それでは、いかようにされると？」

「まずは、ヤツの根城を潰す。今、あそこには無頼のSランクがいるというではないか。我が帝国に引き抜け。ダメならその時は殺せ。そしてオルストン家も皆殺しにせよ。あそこにパルミア家の女がいるのは分かっている。全部まとめて殺せ」

「かしこまりました。必ずやご期待に応えてみせましょう」

物騒な連中だなあ。とりあえず、第2皇子のストーキングを続けることにした。
この宮殿もなんというか豪奢っていうか、趣味はいいんだよなあ。帝国といえば、普通はもっと厳つかったり、質実剛健だったりするんだが。帝都の街も、領土拡張に燃えている国には見えない。葵ちゃんなんか、全く気がついていなかったものな。
宮殿内にある壷や花瓶、その台など、一つずつ丁寧に鑑賞しながらコピーしていく。
退屈なので、すれ違う美人の女官さんたちを見物しながら歩いていく。貴族のご令嬢なんかも多いし、皇宮探索、もといストーキングも意外と楽しいな。……つい目的を忘れそうだ。
ほどなく、第2皇子が立ち止まった。
ん？　この男は誰だろう。ちょっと男前だな。
「これはこれは、皇太子殿下。ご機嫌麗しゅう」
おお、ついに皇太子殿下を発見したぜ。第一印象としては、なかなかの人物に見える。美青年だ。
「シャリオンか。久しいな」
他の人たちが関わり合いたくないのか、そそくさと足早に立ち去るのが実に印象的だ。こ、これはアカン。何か見えない火花が散っているかのように見える。
こんなんじゃ、帝国も先は長くなさそうだな。建国２００年か。元は小国であったが、周辺

諸国を次々と併合して帝国を名乗るようになったそうだ。
周辺国家からは、武力を振りかざすだけの狂犬とか、成り上がりやくざ国家とか言われているらしい。確かに、中枢部にさえ安定の欠片もないな。調度とかがいろいろ工夫されているのも、そういう悪評に屈しないための見栄なのかもしれない。
皇太子は、実に落ちついた佇まいだ。シャリオンが高級将校かと思うような服装であるのに対して、比較的豪奢な服装ではあるものの派手過ぎない。金の刺繍は入っているが、その割には嫌味がないのだ。大国の跡継ぎとしての風格は、なかなかのものといえる。
ただこの2人、お互いの趣味の入った服装が大嫌いらしい。単に服というより、本人同士がとことん嫌いなんだろう。火花がバチバチ散っている。それはもう周りの人間も逃げますわ。いつ殺し合いを始めてもおかしくない雰囲気だ。
「パルミア家の二の舞になるのは絶対にゴメンだ」って感じなんだろうな。
皇太子は顔つきも男前だ。酷薄な感じはしない。なかなかの色男だし、理知的といってもいい雰囲気を漂わせている。髪はきらきらの金髪王子様ヘアーで、目も腐っていない。深いブルーの目が知性を感じさせて印象的だ。俺が女なら、間違いなくこっちを選ぶな。ただの優男でもなさそうだし。秘めたる闘志がうかがい知れる。統治能力は父親を超えるだろうよ。
とにかく2人の皇子にマーカーを付けた。これで本日のお仕事はノルマ達成だ。

２人の皇子は軽く挨拶を交わし、火花を散らしながら別れた。
気になったので、今度は皇太子の後をつける。自分の執務室に帰る途中だったらしい。
皇太子の執務室は趣味がいい。モダンな、それでいて落ち着いたデザインは好感が持てる。明るい木目調の佇まいだ。俺もこういうのに憧れるが、性格からして間違いなくギルマスのアーモンの部屋みたいになるな。
そんな趣味のいい部屋の主は、毒づいていた。
「全く父上もシャリオンも。機を見るという言葉を知らんのか。これだから、我が国の国旗を見て、諸国の王侯貴族までが、あれは獅子ではなくイノシシだと陰口を叩くのだ！」
ぶはははははっ。他でも言われているのかよ。いい話が聞けたなあ。きちっと撮影できたし。ちなみに、皇帝とシャリオンにもカメラをセットしてある。ホーミング機能が付いているので、いつでも回収可能だ。情報をいろいろゲットできるぜ。
「グランバースト卿、あいつは何者だ。なぜアルバトロスに、あのような人物が急に現れる。髪と目の色、そして圧倒的な力は、あの国の初代国王を彷彿とさせる。まさかな」
おや、俺の話になったか。やっぱり、そう思われるのかねえ。俺の髪や目は、色合いこそあれだが、海外では確実に日本人と認識してもらえるレベルなのだ。ご期待には応えてみせるぜ。誰よりも初代国王を知り抜いた生き証人の真理から、初代国王とは『いいとこどっこい』の評

価はいただいているんだからな！
ちょっと先を楽しみにして、今日のところはお暇させていただくことにした。

翌日、これまでの諜報活動の結果を国王陛下に報告する。
陛下は笑って愉快そうにおっしゃった。
「竜殺しコンビのSSランクとSランク冒険者を敵に回し、なおかつもう1人のSランクの冒険者を敵に回すと申すか。まったく愉快な親子じゃのう」
「全くですなあ。ただ、油断は禁物です。皇太子は傑物、やっかいな人物です。俺のことを稀人だと疑っていますね」
「まあ、そのくらいは言うだろう。兄弟の優劣は、幼き頃よりはっきりしておったわ。皇帝が早死にしておったら、やっかいなことになっておったであろう」
「どの道、うちにちょっかいをかけてきたら、その時点で死んでもらいますから」
続いて、アントニオのところへ行く。
こんな形であいつを訪問したくなかったぜ。
オルストン領。そこは王国西部に位置し、突出した産業や特産品はないものの、気候には恵まれた土地だ。武功に偏るきらいはあるものの、全体的には平均レベルを超える豊かな領地で

あった。
代々の領主は『我々貴族はいざという時に国を守れればいい。そう、あの初代国王のようであればいいのだ』という考えであるようだが、その代わりに優秀な代官を置いていた。
先々代の代官を務めていたのが、今の爺やさんである。代官を勤め上げた後は、息子たちの教育係として立派に3人を育て上げた。どうりであの兄弟、根性が曲がっていないわけだわ。一番上のお兄さんなんか、グレていたっておかしくない境遇だったのにな。
オルストンのかつての屋敷を再び領主館にしたと言っていたな。通りすがりの年配の人に領主館までの道を聞くと、すぐに教えてくれた。その人が涙を流し、こう語ったのが印象的だ。
「先代ご領主様には、何の落ち度もなかった。これで先代領主様も浮かばれます」
慕われているね、オルストン家は。よかったな、アントニオ。
辿り着いた領主館は、決して華美ではなく、それでいてがっしりとした佇まいが頼りになる雰囲気を醸し出していた。
俺は、古びた、それでいて風格のある大きな扉のノッカーを2度鳴らした。このノッカーも、竜をあしらった素晴らしい作品だ。どうせこの一族のことだから、ドラゴン退治とかの行事はしょっちゅうだったんだろう。このドア、欲しいなあ。今度頼んでコピーさせてもらおうっと。
鍵の重厚な音がしてドアが開くと、上品な雰囲気を漂わせた老人が出迎えてくれた。爺やさ

んだ。俺はカメラを通して見たことはあるが、向こうは俺の顔を知らない。
「貴方様は？」
「やあ、はじめまして。私はアルフォンス・フォン・グランバーストと申します。ご当主のアントニオ、じゃなかった、オルストン伯爵はご在宅でしょうか」
爺やさんは素敵な笑顔で、出迎えの挨拶をしてくれた。
「ようこそ、グランバースト侯爵様。ご活躍は主（あるじ）より聞き及んでおります。ささ、中へお入りください」
お屋敷は、なかなか趣のある感じだ。強いて言うなら、ラスベガスはダウンタウンの古びた名門ホテルあたりを思わせる。主に木作りが目立つ内装で、それがピカピカに磨き上げられた、古き良き時代を思わせる雰囲気がある。そして、手入れが非常に行き届いている。おかしなものだ。1度完全に没落したのにな。
俺のそういった感慨を見抜いたのか、爺やさんが教えてくれる。
「この領地の代官は、オルストン家に任命された最後の代官でした。いつかオルストン家が復興すると信じて、この屋敷もきちんと手入れされていたのです」
なるほどなあ。ここにも、代々善政を敷いたオルストンの誇りが垣間見える。
「アル」

振り向くと、アントニオの屈託のない笑顔があった。いい顔で笑うようになったじゃないか。愛されているな。

「よっ」

俺の軽い挨拶に苦笑いしながらも、力強い握手を求められる。久しぶりなんで、ガッチリ握手してやった。奥様も出てきたので、ご挨拶を。

「お久しぶりです、マルガリータさん」

「こちらこそ、お久しぶりです、アルフォンスさん」

このメンツなんで、そう堅苦しいことはなしだ。

「ずいぶん急な訪問だな。どうした？」

貴族の場合、手紙を持った前触れが来るのが普通だ。ヤツも貴族に復帰したので、慣れようとしているんだろう。今までは無頼の冒険者暮らしだったからな。

「悪いな。今日はいろいろとあってな」

俺は事情を手短に説明した。帝国で仕入れてきた映像も見せると、アントニオは難しい顔をした。ありがたくはないだろうな。特に最愛の奥さんも狙われているのだ。

「よく知らせてくれたな。ありがとう」

「またちょっと大変になるがな。奥さんはしっかり守れよ。まだうちに帰ってないんで、今日

はもう帰るわ。また連絡をくれ」
そう言うや、転移魔法でその場からかき消えた。

俺は転移魔法でケモミミ幼稚園に帰ってきた。
いつもと変わらない、気の抜けたような、それでいて活気のある空気。今、この俺が何よりも愛おしいものだ。どこからともなくケモミミのチビどもが、わらわらと沸いてくる。
「ただいまー」
「どこいってたのー」
「ないしょー」
「ええー！」
俺の服を引っ張りながら、何人もむしゃぶりついてくる。
「おみやげはー」
「ええー」
いつも通りのたわいもないやり取りをしながら、チビどものミミと頭をぐりぐりしてやる。
そこへアルスがやってきた。
「お帰りなさい。どうだった？」

「ん～、状況はちょっとヤバいかな？　真理やエドたちを集めて話をしたい」
ほどなくして、全員が会議室代わりの俺の部屋に集まった。
「ぶっちゃけ、帝国は俺とアルス、それにオルストン伯夫妻を殺すと言っている。アルス、お前は一応引き抜き工作ありで、断ったら殺すってさ。皇帝から第２皇子への勅命だ。皇太子は渋い顔をしているっぽいな」
「そりゃまた、えらく買ってくれたもんだなあ」
と何事もないような感じで、アルスが軽く伸びをしながら言う。
「そりゃあ、おまえは俺に雇われているだけだからな。伯爵や名誉侯爵とは一線を引かれるさ」
「あはは。帝国はちょっとご免だなあ。逃げてもいいかい？」
などと笑って言っている。普通の人間であれば、笑ってなどいられない状況だが、このあたりはさすがＳランク冒険者だ。ビクともしていない。
「まあ、そのへんは情勢次第だ。俺だって、いざとなったら子供たちを連れて逃げるし」
「それがいいかもねー」
もともとフットワークの非常に軽いアルスが、さらっと同意する。逃げるのも立派な戦術の一つなのだ。
「いや冗談抜きで、家なんかは持ち運べるしな。ヤバかったら一旦退避して、俺だけ戻り、攻

めてきたヤツらを片付けるという選択肢もある」
いろいろ考えはあるが、ここは柔軟にいこう。勝利の条件は子供たちの生存だ。真理だのアルスだのは、殺しても死にそうにないし。警備責任者のエドは、ペンを片手に話を進めていく。
「具体的にはどう攻めてきます？」
「まだ分からないけど、仮にも俺たちを相手にするんだ。Sランク冒険者は用意するだろう」
帝国での諜報活動は継続だな。よし、退避先にできる文字通りのセーフハウスを作ろう。その他の退避先も考えておかないと。
そんな感じで会議は終了した。

まず安全退避先の1番目として、ズバリ『アルバの王宮』を考えた。これに関しては国王陛下におねだりをして、認めてもらえた。
次にアルバ大神殿だ。大神官のジェシカ嬢に取り次いでもらって、王都神殿本部にお願いする。ここは結界があって、許可がないと侵入不可能だ。転移でさえ、許可がないとはじかれた。打ち合わせの最中にハッと気が付くと、精霊に魔力を勝手にチュウチュウと吸われていた。すかさずジェシカの怒声が響き渡る。
「こっら～、あなたたちはまた～。ダメでしょうー」

また精霊が言い訳しているが、俺は笑ってジェシカを宥めると、精霊にお菓子を振る舞ってやる。こいつらは、お菓子や魔力で簡単に手なずけられるから楽だ。いざという時は頼むぞ！

3番目として、王都以外のエルミアに決めた。とりあえず教会でお願いしておく。久しぶりなので、お土産をたっぷりと持っていったから子供たちから歓声が上がった。ここは防衛力に欠けるんで、緊急時のみの退避先だな。メインは、エルミアの冒険者ギルドだ。最悪の場合は、最初にいた村へお願いするかな。

もう知り合いの所ばっかりを、ざーっと回ってきた。久しぶりで積もる話もあったし、子供たちの顔を見られてよかった。

『始まりの町』の冒険者ギルドでは、相変わらず恰幅のいいギルマスが豪快に笑って、俺の出世を称えてくれた。ここで俺は、冒険者としてのスタートを切ったのだ。あまり冒険者らしいことはしていないがな。子供たちを避難させる件も快く了承してくれた。

次に装備の見直しをしておく。

使いやすいので、いろんなものを腕輪型にしていた。武も腕輪にしていたしな。自分的には手首って一番切り落とされそうな部位なんで、どうかとは思うのだが。

まあ、今回はそのまま腕輪でいくか。武も腕輪にしていたのは、使い勝手の悪さが命に関わ

るということがあったんだろう。俺も使い勝手を考えて、最初は腕時計を魔道具に改造して使っていたくらいだしな。

これまではアイテムボックスと転移の2種類に分けていたが、転移を持たせる人には1個に統一するか。バージョンアップや追加装備を渡したりするしな。じゃらじゃらしていると、邪魔になるだろう。

俺はエリの所へ転移する。

MAPで見たら職業訓練所にいた。指導に来ているんだな。

「よっ、エリ」

「あれえ、アルお兄ちゃんどうしたの～」

俺がこんなところに来るなんて珍しいのだ。エリが不思議そうに聞く。

「ちょっと、いろいろあってな。エリのアイテムボックスの腕輪に転移魔法を付けさせてほしい」

「どうして？」

さらに怪訝そうに聞き返す。そんなご大層なものを持たされるのが疑問なのだろう。

俺はちょっと戸惑いながらも、はっきりと言った。

「お前は俺の関係者だから狙われる可能性がある。相手は隣のベルンシュタイン帝国だ。この国に攻めてこようとしていて、俺や他のSランクを戦争の前に殺そうとしている」
「そっか……」
エリも少し眉を寄せて考えていた。家族に何かあったらと思っているんだろう。
「あと、マーカーというものを腕輪に付与させてくれ。マーカーは俺のMAPというスキルで居場所が一目で分かるものだ。欠点としては、使える数に制限があってな。なので、敵に使いたいんだ。その腕輪は、俺のアイテムボックスの中で設定しておけば、マーカーとしても使える。エリには、マーカーを設定した腕輪を使ってほしいんだ」
「うん、分かった。ありがとう。お願いします」
エリの腕輪に転移を組み込んだ後、もう一つ回復魔法も組み込んだ。
魔法は練習させよう。一応、この腕輪も個体識別でエリしか使えないようにしてある。
「あとなあ、これを渡しておこう。俺への連絡手段だ」
それはスマホだった。正確には魔導通信機といった方がいいのか。電話番号を各通信機に合成するというシンプルな方法で、個別識別に成功した。物体に魔法を合成し、その魔法を識別するのだ。こいつには、エマージェンシーの時に押す非常信号スイッチを取り付けてある。
使い方を教えたら、エリは目をキラキラさせている。ああ、この子も女の子なんだな。下に

2人小さい子がいるし。しばらくはエリからの電話攻勢が続きそうだ。
アントニオにも新しいものを渡しておいた。奥さんの分も欲しいと言われたので渡した。安否確認に使えるからいいと思ったのだが、毎日いちゃらぶコールばかりしていそうな気もする。新婚だから、それでもいいか。
メールの機能も付いている。この世界の文字を使えるようにしたが、このあたりは真理に手伝ってもらった。武の助手をしていたので、そういう方面も多芸らしい。
王都アルバの冒険者ギルドへも顔を出す。
「ギルマスいるかい？」
「部屋にいますよ」
サブマスのレッグさんが教えてくれる。一応入る時、ノックくらいはしておいた。
「入れ」
「ちーす」
「お前がそこから入ってくるなんて、雨でも降らなきゃいいがな」
少し眠そうな顔で、仕事中のアーモンが答える。
「降るのは血の雨だろ」
そして、俺はスマホを手渡した。

「何だ？　これは」
「これはスマホといって、離れた場所にいる相手と連絡が取れるものだ。頼むからアーモンも持っていてくれ」
「またお前は、そういうものをバラまいて」
案の定、ギルマスは渋い顔をするが、構わずに押し付ける。
「あんたには持っていてほしいんだ。それとアイテムボックスを貸してくれ。新機能をいくつか付けたい」
「何を付けるんだ？」
若干警戒気味にアーモンが聞く。
「転移魔法と回復魔法を付与する。あとマーカーを付けておくぞ。いろいろヤバい雲行きだから、やらせてほしい」
「うーん、それも考え物だが、今回は仕方がないな。マーカーって何だ？」
「俺のレーダーにあんたの居場所がくっきり映る。オリジナルは10個しか使えないんで、魔道具を持たせたりできない敵に使いたい。アイテムボックス内で腕輪にマーカーを設定できるので、味方はこれを使ってほしいんだ」
「分かった。やってくれ」

了承をもらって腕輪を受け取ると、アイテムボックスの中で加工する。俺の魔法も突っ込んで、特別製のオリハルコン魔法剣も2振りほど入れておいた。

ギルマスは戻ってきた腕輪の中身を見て少し顔を顰めたが、何も言わなかった。俺がそうした意味を汲んでくれたのだろう。

ケモミミ幼稚園に戻って、アルスの分もフル換装した。こいつにはいちいち聞かない。そういうノリの男だし、だてにSランクじゃないのだ。そういう点で文句が出ない分、アントニオよりも話が早い。もちろん新型スマホも渡しておく。

これでSSの俺、Sのアントニオとアルス、元Sランクで今でも現役顔負けのギルマスのアーモン。このメンツとは、世界中どこにいても連絡が取れるようになった。ダンジョンの中でも一部の魔素が乱れた圏外地域を除けば通じるし、いつでも転移魔法で呼び出せる。

いろいろ考えて、『ルーバ爺さん』にも1個預けることにした。国王陛下に渡すのは躊躇われる。軍に使いたいと言われてしまうとまずい。これは仲間内だけで使いたいのだ。

あとチームエドにも、完全装備の腕輪を与えておいた。いざとなったら、彼らが子供たちを逃がしてくれるだろう。このへんは信頼関係だ。いつでもスイッチは切れるし、ホーミング機能で回収できる。

その他、自動警報装置を作っておいた。これは、魔力の照射器と魔力に反応するセンサーで

構成されている。センサーはマギクリスタルを加工してみた。魔力で作られたものは魔力に反応し、照射された魔力は物体に当たると遮断される。この装置をＰＣスキルの周辺機器として接続し、反応すればアラームが表示されるようにした。魔力には探知系の魔法と鑑定が載せてあり、侵入したのが何者かも分かる。識別した対象が登録された人物なら、ログには記録されるが警報は出ない。

ディスサーチも付与してあるので、敵にはその存在が探知できない。というか、地球式の警報装置なんて、こちらの世界では存在すら知らないよね。

自動迎撃兵器も装備した。センサーを応用した敵味方識別装置を搭載する、重機関銃タイプの魔法機関銃を配備した。土魔法で埋め込んであるが、敵を検知すると一斉に飛び出して、火、いや魔法を吹く。仕組みは違うかもしれないが、元ネタは軍用のロボット機関銃だ。取り扱いは要注意の代物といえる。

さらに、ダメ元で真理に聞いてみた。

「お前ほどじゃなくても、魔法生物あるいはゴーレムのガーディアンみたいなものは作れないのかな？」

「作れないこともないけど、制御のシステムとかが難しいかも。時間稼ぎのための単純な動きのゴーレムならば作れるわ。どっちかっていうと、その方が貴方向きかしら。魔力に任せて強

力なものを大量に生み出すことができるし、そいつらを盾にして逃げるもよし、物量作戦で踏み潰すもよし」

なるほどな。今はそれがいいだろう。俺は真理からゴーレム生成の魔法を教わった。こいつにはミスリルの核を与え、土のボディは壊れても周りから吸い上げて、供給魔力の続く限り動き回る。大ざっぱな命令、例えば前進して踏み潰せとか、その城を叩き壊せとかによって自動的に動く。細かい命令は、その都度出すしかない。将来はもっと精密な物を作ろう。

くっくっくっ。オリハルコンやベスマギル製の魔核も作ってやったぜ。ボディは、鉄、ミスリル、オリハルコン、ベスマギルに換装できる。換装用ボディもアイテムボックスのインベントリに用意されている。魔核は、真理を解析して劣化コピーしたものだ。将来はもっと高性能なゴーレムが作れるだろう。

ゴーレムには、俺の使う魔法の全てを付与した。巨大な魔法金属製の魔力バッテリーを搭載してみる。こいつも規格サイズになっていて、いつでも換装可能だ。同じ型でも原料によって１０００倍は性能が違う。

さらに物理兵器も全て搭載した。いざという時には、中に人間が乗れるようにコクピットまで……最早これはスーパーロボット⁉

真理がそれらを眺めて呆れていた。

（デジャヴ……１０００年前の悪夢再び！　また余計なことを言っちゃったわ）

スーパーロ……いや、ゴーレム用のライフルを作成してみた。

通常は、口径２００㎜のストーンバレットが標準だ。ライフル弾に成形して回転運動を与えるのは、人間用の魔法銃と同じである。

お蔵入りになって使う機会のなかった光線砲も、ゴーレム用に試作する。やっぱり、これは男のロマンだ！　消滅の光メギドをビームに凝集して、命中時に敵の体内で爆散する効果を与えている。あとは、ドラゴンブレスのビーム版や、掃討に便利な火炎放射器の魔法なども。

銃身の下には、雷魔法で打ち出す電磁銃の砲身を装備する。弾丸はオリハルコンだ。命中したら、敵を貫いて内部で魔力爆発を起こし、その全てを魔力エネルギーに消費するように設定する。これは核爆発並みの威力があるので、使う場面を選ぶ兵器だ。

敵が地下要塞に籠もった時を想定して、地中貫通弾（バンカーバスター）を製造しておく。全てを貫通するオリハルコンのボディ。設定によっては、このボディ自体が強大なエネルギーを放って爆散する。その生成時に食い尽くした凶暴な魔力を、全て魔法爆発のエネルギーに還元するのだ。水爆の地下核爆圧に匹敵する衝撃だ。例え厚いベトンに包まれた地下要塞といえども、すぐぺしゃんこさ。各種シールドを無効化する魔法を作成し、バンカーバスターに搭載してみた。さらにはバンカーバスターの後部に火薬式のブースターを搭載。本体の４倍の大きさの無煙火薬で、地上

すれすれから点火して地下へ打ち込む。いかなる堅個な要塞も貫通するだろう！　それから、それから！

ハッと気が付いて後ろを振り返ると、ちょっと長生きしている美人のお姉さんが冷たい眼差しでこちらを見ていた。ちょっと興奮し過ぎたぜ。

少し気を落ち着けてから、爆撃機を製造にかかる。なに、たいしたものじゃない。モックアップの爆撃機の模型に人が乗れるようにして、アイテムボックスの爆弾倉を設置しただけだ。飛行は風魔法と重力魔法を使用し、レビテーションも付与しておく。万一の際には滑空することも可能だ。まあ、無人の場合はホーミングで回収すればよいのだが。

竜騎兵（ドラゴンナイト）の襲来に備え、ドッグファイトのできる戦闘機も各種用意した。空中でのホバリングも可能なＶＴＯＬ型も用意する。まあ、他の機体でもできるのだが、男のロマンだよ、男のロマン。これくらいあれば、どんな敵が来ても大丈夫そうだ。それら一式は、真理にも持たせておいた。

「だから、あたしに何と戦争をしろと……」

女の小言は聞きたくない。俺は転移魔法で素早く消える。

どこへ行ったかって？　決まっている。いきなりオルストン家に現れ、執事さんと奥方に手を上げて挨拶する。すかさずアントニオの手を取って拉致し、ガラスの園へ行き一通り見せた。

「お前なあ……まあいいか。そうだな。ロボット機関銃と、ゴーレム一揃いは面白いな。あと警報装置かな」

さすがはアントニオだ。話が早い。それに、やっぱり男の子だぜ！

早速オルストン家に戻って、警報装置を取り付けてテストする。警報の発信先はアントニオ夫妻のスマホだ。一応スイッチ一つで展開できるバリアも装備しておく。全てアントニオの腕輪から操作できるようにした。

そこまで完了して、俺は挨拶もそこそこにドロンと消えた。

ケモミミ幼稚園に戻ると、警報装置を設置して、発信先をエドなどのスマホに設定する。他の警備隊員にもスマホを貸与して、ハンズフリーセットも忘れない。パーティチャットのモードもセットしておいた。ケモミミ幼稚園用のバリアシステムも装備しておく。

警報装置にバリア、自動迎撃システム、監視カメラ網、通信装置、アサルトライフル。さらに、地上攻撃が可能な戦闘機に、戦車代わりの巨大人型兵器（ゴーレム）。ケモミミ幼稚園の警備システムは充実の一途を辿った。ここまで警備が厳重な幼稚園は、どこの世界にもあるまい。

冒険者で構成される警備隊は、絶え間ない訓練の日々だ。

さあ帝国よ。いつでも攻めてこい。お前らの動向は見えないカメラがしっかり監視している

んだからな。
と、いかんいかん。すっかり敵襲に対する防衛準備に夢中で、情報収集を怠っていた。まずは王宮から確認しにいく。
「今のところ、有益な情報はないのう」
そうですか。それでは拙者これにてゴメン。その場でドロンと消える。姿が消えただけで、まだその場にいるのだが。
「全くもって、あやつときたら」
あらあら、国王陛下が溜め息を吐いているよ。まあ、いつものことだからいいか。
「まあ、あれはあれでよいでしょう。それよりも来る防衛戦の予算関係で……」
おっさんにとってはお遊び同然の対帝国戦も、国の偉い人にとっては大変なのである。
次はニールセンのところだ。狩りの最中だったようで、本日の獲物はなかなかのものらしい。お付きの人を連れて楽しんでいらっしゃる。これはダメだ、次へいこう。
次は皇帝の所だ。執務室で……居眠りをしていた。まあ年だとしんどいよね……。いろいろと重要そうな書類を捌(さば)いていく。たいした成果がないな。
次は第2皇子シャリオンだ。なんと、真昼間から女を連れ込んでハッスルしてやがった！女との戯言で何か言ってくれるかもと思ったが、これは監視するのは精神的にくるものがある。

ひとまず退散しよう。俺に出歯亀の趣味はないのだ。

まったく、どいつもこいつも！

皇太子、あんただけが頼りだぜ。だが、皇太子殿下は……書類の束と、がっぷり四つに格闘していらっしゃった。机の前で唸っている。

「殿下。睨んでいらっしゃっても、書類の束は減りやしませんよ」

理知的な感じで、偉い上司にも容赦がなさそうな20代前半の女性が言った。

「フランチェスカ、お前はいいよな。自分がやるわけじゃないんだから」

「当然です。私の仕事じゃありませんので」

帝国皇太子殿下のドランさんは、黙々と書類との格闘を始めた。

こいつら本気で攻めてくるつもりあるのか？　馬鹿馬鹿しくなっちゃうな。帰っておチビたちと遊ぼうっと。

ケモミミ幼稚園に戻った俺は、前から考えていたジャングルジムを設置してみた。これも作るには作ってあったのだが、様子見をしていたのだ。全員に、落ちて頭などを打ったりしないように注意してからＧＯサインを出す。一斉に、ジャングルジムにむしゃぶりつく子供たち。おチビ猫も、えっちらおっちらと登っていく。ほっこりして見ていたのだが、ハッと気が付く

とジャングルジムの天頂を制覇する怪しい影がいた！

エリーン、お前か！　そのドヤ顔をやめろよな。次の瞬間、小気味のいい衝撃音が鳴った。エドがエリーンの頭にハリセンを振り下ろしたのだ。そのまま襟首を掴まれて、エリーンは手を振りながら引きずられていく。子供たちも手を振り返して、それを見送った。まあ、こういうのは日常風景だしな。

次は回転遊具だが、作ったもののまだ出す勇気はないな。獣人の子は力が強いから、何人かで回すと相当なスピードが出て、乗っている子がぶっ飛んでしまう可能性が高い。

あと、あれは何ていうんだったかな。手でぶら下がる、水平に渡したはしごみたいなやつ。そう、雲梯だ。試しに作ってみたが、ジャングルジムほどには人気が出なかった。これって攻城兵器としての名前もあるものなんだよな。この世界では、そっちの需要の方がありそうだ。

あ、鉄棒を忘れていたわ。いろいろな高さを作ってみた。尻尾でぶら下がる芸当を早速マスターしたヤツがいた！　猫幼男だ。ぶらぶら揺れて面白い構図になっている。普通は猫には無理じゃないかな、あの芸当は。熊っ子２人が、なんか悔しそうだ。あのまん丸尻尾じゃ、ぶら下がるのは無理だろうな。でもおっさんは、あの超可愛い熊尻尾が大好きなんだけど。

遊具以外にも、以前から欲しかったものを作った。バンガローを高床式にして机と椅子のセットを外し、それを取り付ける。そう、縁側だ。上には畳を敷いてみた。イグサはなかったの

PAPA

で、それっぽい草で代用。掛け軸と墨絵も飾る。壁は、壁土の上からキレイな壁材を塗った。おっさんには左官のスキルはないので、アイテムボックス謹製である。作成された浴衣を着て、醤油煎餅を齧って日本茶を啜る。悪くない一時だった。もう毎日がこれでも不満はないくらいだ。

だが、ここは幼稚園だった。あいつらが見逃がすはずがない。あっという間に、縁側と畳は園児で埋め尽くされた。俺はヤツらに一言だけ注意する。

「お前ら、ここに上がる時は靴を脱げ」

子供たちもお煎餅は気に入ったようだ。口の回りを粉だらけにしながら食っている。

あ、一つ大事なことを忘れていた。急いでアドロスの代官の所へ転移魔法で移動する。

「おや。こんにちは、侯爵閣下。今日はまた変わった装いですね」

あ、しまった。着物のまま来ちゃったぜ。足元も草履だし。俺は熱い日本茶と煎餅を代官に勧めながら、話を切り出した。

「そういや、今度帝国のヤツらがこの街に攻めてくるんですよ」

ブーッと、お茶を吹く代官。

「そ、それはまた、なぜでしょう?」

俺が渡したタオルでお茶を拭きながら代官が聞いてくる。

「ケモミミ幼稚園が狙いですよ。私を精神的に追い詰め、あまつさえ殺すと。できれば、ついでにうちのSランクのアルスを引き抜ければよし。無理なら殺すと。アントニオ、オルストン伯爵ご夫妻も殺したいとか」
「その情報はどこから？」
やや冷や汗をかきながら聞いてくる代官。冒険者の街ではあるが、彼らは代官の部下ではない。街として、帝国軍の精鋭を迎え撃てるはずがないのだ。
「帝国の皇帝が自ら第2皇子に勅命を出していました。私、その場で見ていましたんで」
代官はうーむと唸っていたが、一応は理解してくれたようだ。
「分かりました。警備の方は厳重にしておきます」
俺も頷いて答えた。
「こっちの方は迎撃準備ができていますが、帝国のヤツらが不真面目で、ちっとも攻めてこないんですよね。こんなことは早く片付けて、夏祭りやプール開きをしたいのですが」
代官も俺の発言に苦笑いして、相槌を打つ。
「それもいいですね」
「街でいろいろやりたいですよね」
俺はそう挨拶をして、代官屋敷を出た。

ケモミミ幼稚園に戻ると、組み立て式の幼児用プールを出してみた。待ちきれない子供たちが周りをうろうろしている。一応組んでみたが、あっという間に子供で一杯になってしまう。おかげで水を入れる前に、サイズの確認ができてしまった。

これなら使えそうだな。職員をみんな呼んできて、注水試験をする。水漏れはないようだ。

激しい水音がした。飛び込んだヤツらがいるのだ。そして子供たちが次々と服のまま飛び込んでいく。まあ、やるとは思っていたけれど。溺れるヤツがいないように、職員みんなで付きっ切りで見ていた。今、季節は夏なので気温は高い。日本のように梅雨で蒸し暑いわけではないので、この季節にしては快適だ。浄水設備の代わりに浄化の魔法を使用する。

冷麦やソーメンも開発済みなので、流しソーメンも悪くない行事だ。あと、花火も試作したが、安全性にいま一つ自信がない。静電気が怖いのだ。静電仕様の魔道具とかを身につければ大丈夫かもしれないが……。みんな火薬の怖さを知らないからな～。

祭りをやるにしても、帝国が早く攻めてこないと落ち着いてやれないな。こっちから先に攻めるか、それとも催促してやろうか。

心は敵襲よりも、夏のお楽しみにシフトしていた。

おっさんのリメイク冒険日記3

～オートキャンプから始まる異世界満喫ライフ～

試し読みはここまで
続きは書籍版でお楽しみください

書籍情報はこちら

http://books.tugikuru.jp/detail_ossan.html

緋色優希
イラスト 市丸きすけ

ツギクルブックス